

豊中市所在

# 蛍池遺跡（その 3－2）

## 発掘調査報告書

—大阪モノレール蛍池西線建設に伴う発掘調査—



1997年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

Hotarugaike Site  
(No. 3-2)



11. 1997

Osaka Center for Cultural Heritage



豊中市所在

# 螢池遺跡（その3-2）

## 発掘調査報告書

—大阪モノレール螢池西線建設に伴う発掘調査—

1997年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



(上) 古墳時代後期の土坑群（I 区）  
(下) 今回の調査で出土した遺物



(上) 古墳時代後期の土坑群 (II 区)

(下右) 奈良時代の遣構

(下左) II 区から出土した石器

## 序 文

螢池遺跡は、豊中市螢池に所在する旧石器時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡です。

今回の調査は、大阪モノレール建設工事に先立つものです。今回の調査では、古墳時代の墓とみられる土坑群や、奈良時代の掘立柱建物跡などの遺構が検出され、遺物も多数出土しました。これらの遺構・遺物は当地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明していく上でもかけがえのない貴重な資料となるものと確信されます。

今回の調査を実施するにあたっては、大阪府モノレール建設事務所、豊中市教育委員会、地元自治会など関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも、当センターの事業に関して、各位の変わらぬご理解とご支援をお願い申上げます。

平成9年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井 清足

## 例　　言

1. 本書は、大阪モノレール建設工事に先立つ螢池遺跡（その3-2）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府モノレール建設事務所の依頼を受け、側大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は、側大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所長玉井功の指導のもと、調査第1係長西口陽一、同技師伊藤武が担当した。
4. 調査は、平成9年8月29日から同年11月30日に実施した。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会をはじめとする関係諸機関のご指導、ならびに下記の諸氏のご教示を賜った。記して感謝の意を表します。（敬省略、順不同）  
【調査指導】藤澤一夫、橋本高明、柳本照男、服部聰志、清水篤  
【調査補助】平田麻希
6. 報告書作成にあたっては、下記の諸氏の協力のもと、北部調査事務所各位のご意見を参考にした。  
【整理】田中千賀、松田智子、内山義行
7. 調査区全景及び遺構の写真は伊藤が撮影し、遺物の写真は平井貞子が撮影した。
8. 本書の執筆分担は目次に示し、編集は伊藤がおこなった。

## 凡　　例

- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用い、平面位置は、国土座標軸第VI座標系に基づいた。本文中における座標の記載は、すべてm単位である。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀雄編 1998『新版標準土色帖』第8版 監修農林水産省農林技術会議事務局・色票監修財団法人日本色彩研究所に準拠した。
- ・遺物実測図では基本的に弥生土器・土師器は断面を白色で表現し、須恵器などの弥生土器・土師器以外の土器は黒色とした。
- ・遺物写真的縮尺率は任意である。
- ・写真図版の遺物番号は、実測図及び一覧表の番号に対応する。
- ・古墳時代後期の土坑平面図内に示した番号は土坑番号である。

## 本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯 .....	(西口) .....	1
第2章 位置と環境 .....	(西口) .....	2
第3章 調査の成果 .....	(伊藤) .....	3
第1節 基本層序 .....		3
第2節 造構 .....		4
< I 区 >		
< II 区 >		
第3節 遺物 .....		12
< I 区 >		
< II 区 >		
第4章 まとめ .....	(伊藤) .....	18

## 挿図目次

第1図 調査地周辺の遺跡分布図 .....	1
第2図 調査区配置図 .....	2
第3図 基本層序柱状略図 .....	3
第4図 I 区 6 面 古墳時代後期土坑平面図 .....	5
第5図 I 区 6 面 古墳時代後期土坑平面・断面図 .....	7
第6図 II 区 3 面 奈良時代造構平面図 .....	8
第7図 奈良時代建物跡平面・断面図 .....	9
第8図 配石造構平面図 .....	9
第9図 II 区 3 面 古墳時代後期土坑平面図 .....	10
第10図 II 区 3 面 古墳時代後期土坑平面・断面図 .....	11
第11-1図 出土遺物実測図 .....	16
第11-2図 出土遺物実測図 .....	17
第11-3図 出土遺物実測図 .....	18
第12図 奈良時代建物跡配置略図 .....	19
第13図 古墳時代後期土坑群分布図 .....	20

## 写 真 目 次

写真 1 土坑37平面検出状況 .....	6
写真 2 建物跡 2 柱穴出土柱根 .....	11

## 表 目 次

第1表 出土遺物一覧表 .....	13~15
-------------------	-------

## 図 版 目 次

図版 1~4 : 造構

図版 5~10 : 遺物



# 第1章 調査に至る経緯

螢池遺跡は、豊中市螢池に所在する古墳時代後期の遺跡の一つである。今回の調査は、大阪モノレール建設工事に先立つものである。この遺跡については平成元年度の大坂府教育委員会、平成2・3年度の豊中市教育委員会による試掘調査によって発見・周知されたものである。平成4・5年度には、(財)大阪文化財センターによって発掘調査され、平成7年度には、(財)大阪府文化財調査研究センターによって発掘調査が行われている。今回の発掘調査は、平成4・5年度に行われた調査範囲に隣接する箇所の調査で、大阪府教育委員会の指導のもと、大阪府モノレール建設事務所の委託を受け、(財)大阪府文化財調査研究センターが平成9年8月から11月に実施することとなった。



第1図 調査地周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

## 第2章 位置と環境

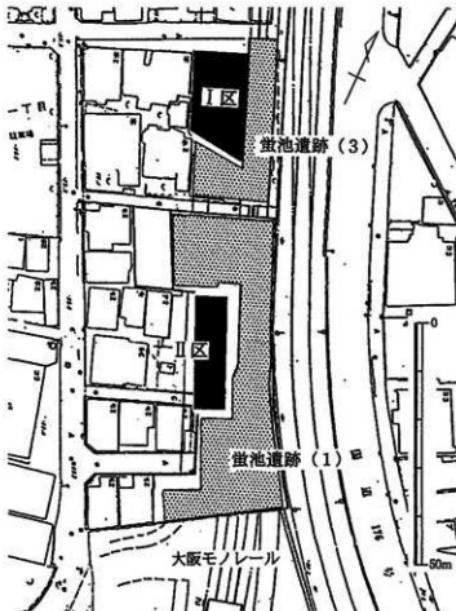
螢池遺跡は、行政区画では、豊中市螢池中町1丁目～3丁目に所在している。遺跡範囲は、これまでの調査によって、南北375m東西340mの範囲と判明している。遺跡の現況は、阪急宝塚線螢池駅前の住宅・店舗密集地となっている。遺跡の標高は約23mで、洪積層である豊中台地上に位置している。

遺跡の北半部には、江戸時代の麻田藩陣屋跡が残っていて、従前の発掘調査で、陣屋外堀、田畠、井戸等の遺構が検出され、当時の藩士達が使っていたであろう多数の陶磁器類が出土している。

遺跡の南半部の調査では、旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代中期の土器等の遺物が出土し、古墳時代後期の79基の土坑群や奈良時代の掘立柱建物跡2棟、中・近世の水田等の遺構が多数検出されている。

遺跡の南側の南門前池の調査では、池底から2本の谷の存在が明らかとなり、奈良時代の溝も検出されている。南門前池の南段丘上には、古墳時代前期の三角縁神獣鏡、車輪石の出土が伝えられる御津山古墳が存在し、遺跡北側の螢池東遺跡からは、古墳時代中期初頭の棟持柱をもつ5間×5間の倉庫跡が5棟も近接して検出されている。

このように、この螢池遺跡周辺には、近年の発掘調査により、思いもよらなかった遺跡の発見、遺物の出土が相繼いでいる。歴史的遺産の極めて豊富な地域と指摘することが出来よう（第1図）。



第2図 調査区配置図 (黒塗りは今回の調査区)

## 第3章 調査の成果

調査地はこれまでに実施された螢池遺跡（1）・（3）において未調査となっていた箇所の調査である。調査区は南北の2箇所に分かれる。I区は北の螢池遺跡（その3）の西側で、調査面積は204m<sup>2</sup>、II区は南の螢池遺跡（1）の西側で、調査面積は110m<sup>2</sup>ある。（第2図）。

### 第1節 基本層序

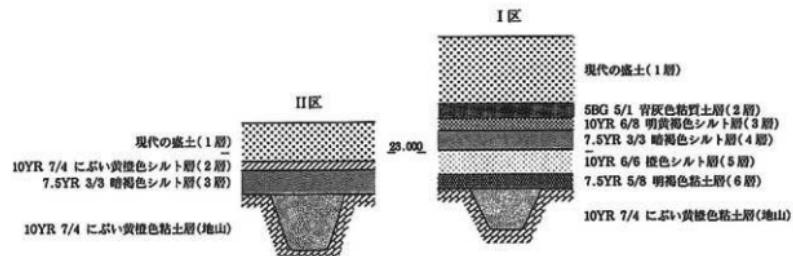
I区では調査区の北壁の一部を、II区では西壁の一部を記録した。

I区とII区とでは層序が若干異なる。I区では最終遺構面（地山）まで6層、II区では3層が堆積する。

I区では上から現代の盛土（1層）が55cm、近世以降の耕土である青灰色粘質土層（2層）が12cm、中世の土器を包含する明黄褐色シルト層（3層）が10cm、奈良時代の土器を包含する暗褐色シルト層（4層）が17cm、同じく奈良時代の土器を包含する橙色シルト層（5層）が18cm、古墳時代後期の土器を包含する明褐色粘土層（6層）が12cmと堆積し、にぶい黄橙色粘土の最終遺構面（地山）に達する（第3図右）。最終遺構面では古墳時代後期の土坑を検出したが、大半の土坑は複雑に切り合っており、純粹な最終遺構面での検出が困難であったため、若干更に掘り下げる土坑の輪郭を検出した。これは次に述べるII区でも同様である。なお、I区の西北部の約1/2は、現代の擾乱により削平されており、現代の盛土（1層）の直下が最終遺構面（地山）となる。

II区では上から現代の盛土（1層）が33cm、奈良時代の土器を包含するにぶい黄橙色シルト層（2層）が6~8cm、同じく奈良時代の土器を包含する暗褐色シルト層（3層）が18~22cmと堆積し、にぶい黄橙色粘土の最終遺構面（地山）に達する（第3図左）。この面で奈良時代の遺構と古墳時代後期の遺構を同時に検出した。これまでの調査では、2層のにぶい黄橙色シルト層中には中世の遺物が含まれていたが、今回の調査では、2層掘削後の面で平安時代の白磁が1点出土した以外は、中世の遺物は全く含まれておらず、奈良時代までの土器に限られる。

なお、本書では1層除去後の面を1面、2層除去後の面を2面、以下同様に各遺構検出面を呼ぶこととする。



第3図 基本層序柱状略図 (1 : 40)

## 第2節 遺構

以下、各調査区ごとに検出した遺構について報告する。

< I 区 >

(1面) 井戸 1基と鋤溝を検出した。

井戸は調査区の中央やや西で検出した。現代の盛土除去後に検出したが、調査区西北部はこの盛土が6層にまで及ぶため、実際には6面での検出となる。おそらく1面から切り込んでいたと思われる江戸時代後期以降の井戸である。井戸は南北2.25m、東西1.5mの楕円形の掘方で、掘方の南よりに井戸枠を据える。井戸枠には平瓦(井戸枠瓦)を使う。瓦は1段に10枚を使い、直径0.75mの円形に組む。井戸底まで確認できなかったが、3段目までを確認した。おそらく検出面より上部も同様に瓦が組まれていたものと思われる。

鋤溝は攪乱の及んでいない南方で密集して検出した。幅10~20cm程度の細溝である。南北と東西方向の溝があり、国土座標のX=-134.158のラインを境に北が南北溝、南が東西溝とに分かれる。鋤溝は北で西に約17度振れる。これは調査区のすぐ北に接して残る麻田藩陣屋跡の振れに近い。陣屋が構えられた17世紀初頭以降の鋤溝であろうか。

(2面) 鋤溝を検出した。幅10~20cm程度の細溝である。1面と同様にX=-134.158のラインを境に北が南北溝、南が東西溝とに分かれる。国土座標の東西南北にはば重なる。

(3面) 鋤溝を検出した。幅10~20cm程度の細溝である。1・2面と同様にX=-134.158のラインを境に北が南北溝、南が東西溝とに分かれる。国土座標の東西南北にはば重なる。

(4面) 調査区の東南部で南北方向の溝を1条検出した。幅20cmの細溝で、振れは2・3面検出の鋤溝とはほぼ同じである。

(5面) 顕著な遺構は検出できなかった。

(6面=地山面) 土坑119基を検出した。密集した不定形の土坑で、複雑に切り合っている。純粋な6面での検出が困難であったため、若干この面を振り下げて土坑の輪郭を検出した。したがって、第5図では土坑の平面幅より断面幅が多少広くなるものもある。

この土坑に関しては、粘土採掘坑とする意見と、土壤墓とする意見の大きく2つがある。螢池遺跡(1)の調査で行った土坑内に残る残存脂肪の分析では、高等動物の脂肪が残存していることが確認されており、土壤墓の可能性が高いとされている。

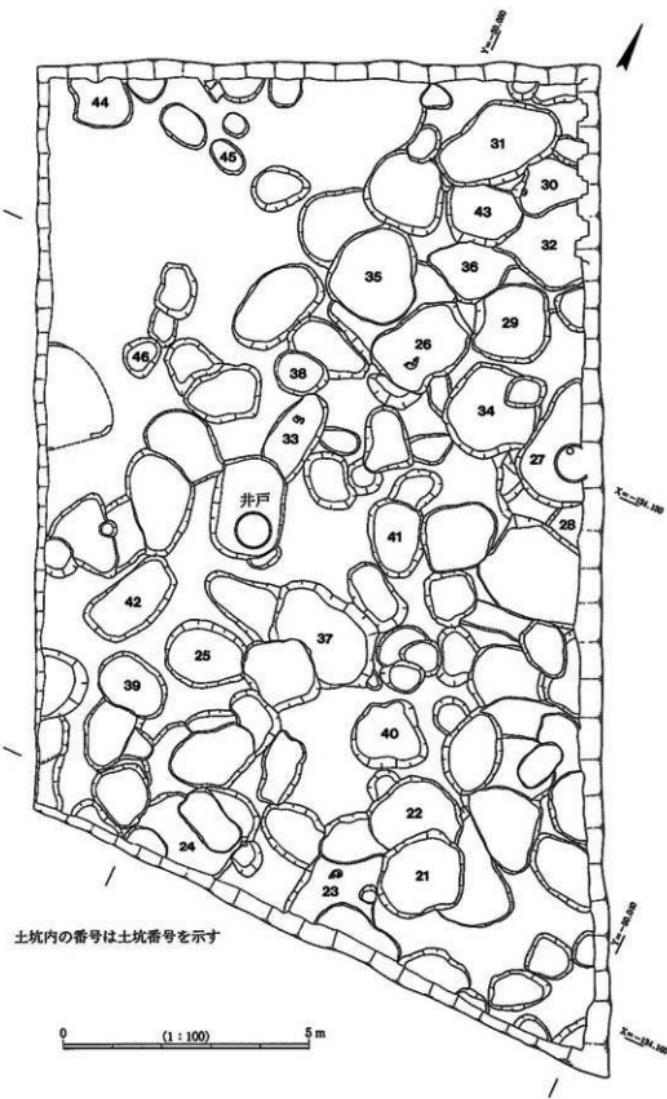
今回の調査では、119基中18基の土坑より土器片が出土した。すべてが破片で、完形品はない。小片も含まれるため、以下に大型片が出土した土坑についてのみ報告する。

土坑21は長辺2.15m、短辺1.9mのほぼ円形で、深さ0.4mである。土坑南端の底のやや上から、古墳時代後期の須恵器の壺体部片が、内面を上にして出土した。

土坑23は長辺1.8m以上、短辺1.9mの楕円形と思われる。深さ0.23mで、北よりの底のやや上から、古墳時代後期の須恵器の壺体部片が、内面を上にして出土した。

土坑24は長辺2.1m以上、短辺2.05mのナスビ形で、深さ0.23mである。土坑東端の底のやや上から、古墳時代後期の須恵器の壺口縁部片が、口縁を下にして出土した。

土坑26は長辺2m、短辺1.45mの隅丸の長方形に近い。深さ0.28mで、西南よりの底面から、古墳時代後期の須恵器の壺口縁部片が、口縁を下にして出土した。



第4図 I区6面古墳時代後期土坑平面図

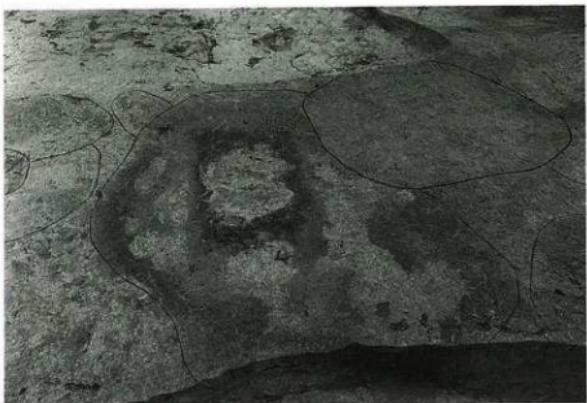


写真1 土坑37平面検出状況（北から）

土坑30は長辺1.55m以上、短辺1.3mのナスピ形で、深さ0.27mである。土坑西端の底のやや上から、古墳時代後期の須恵器の壺体部片が、内面を上にして出土した。

土坑33は長辺1.85m以上、短辺0.95mの椭円形で、深さ0.15mである。北よりの底面から、古墳時代後期の須恵器の壺体部片が、内面を上にして出土した。

以上のように、出土する土器には壺の破片が多く、また土器の内面を上にして出土するものが多い。土坑の大きさには大小様々があるが、ざっと大中小の3種に分類することができる。すなわち1：直径2m前後かそれ以上のもの、2：直径1.5m前後のもの、3：直径が1m前後かそれ以下のもの、である。大型のものは119基中29基で全体の24%、中型のものは58基で全体の49%、小型のものは32基で全体の27%である。それぞれの典型的なものとして、大型は土坑31・34・37、中型は土坑39・41、小型は土坑45・46などがあげられる。

平面形は円形、椭円形、隅丸の方形、ナスピ形などがある。

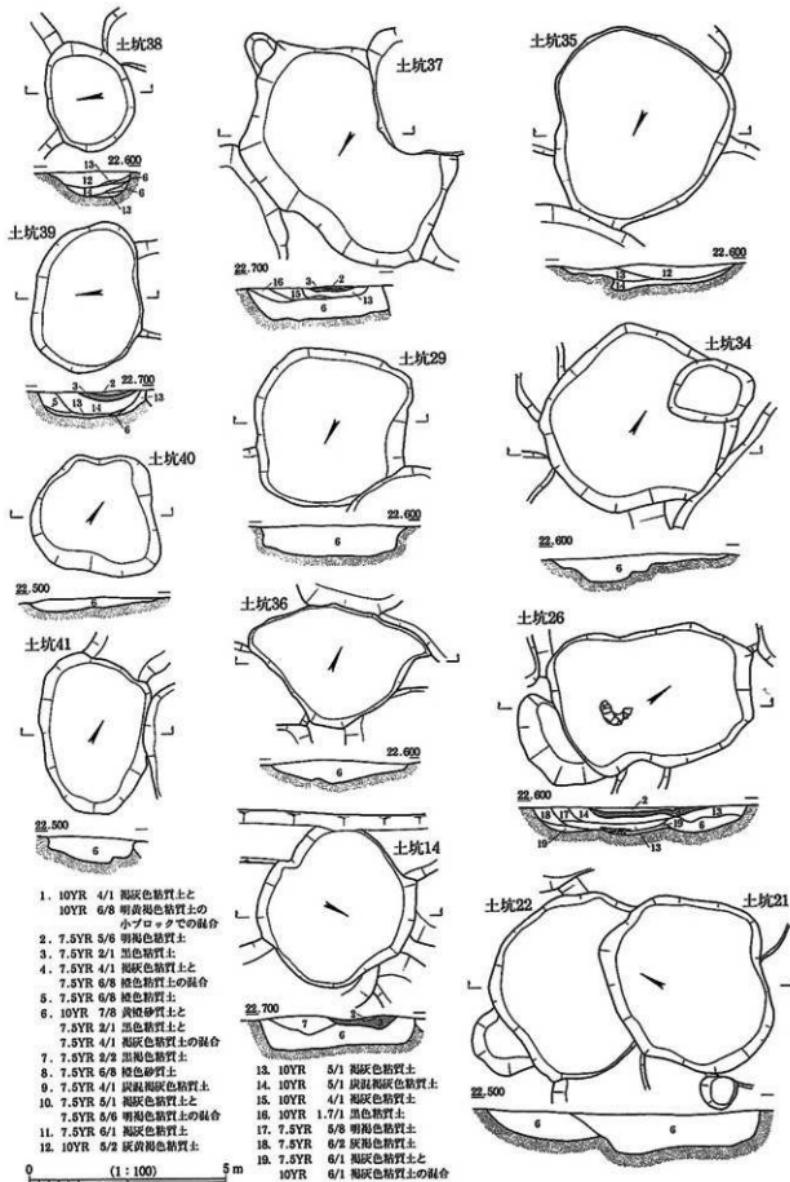
また、土坑の断面観察から、堆積の仕方にも大きく2種があることが判明する。1：レンズ状の堆積を示し、中間層に黒色粘質土層が入るもの、2：レンズ状の堆積をせず、黄橙色砂質土・黒色粘質土・褐灰色粘質土の3種が大きなブロックとして混在する1層だけのもの、の2種である。前者は基本的に後者の土層を最下層とし、中間に黒色粘質土層、最上層に明褐色粘質土層と堆積する。土坑26・37が代表的な例で、この種の土坑は平面検出の際、黒色粘質土層がリング状にめぐる。土坑37はその中ではやや特異な例で、平面検出の際、黒色粘質土層が組合せ式の木棺墓を思わせる輪郭で検出された。断ち割りの結果、各層が単に外から内へレンズ状に順序良く堆積した結果、偶然に組合せ式木棺状に黒色粘質土層が平面に現われたものであったことが確認された（表紙右下カラー）。なお、後者の典型例としては土坑21・22があげられる。これら2種の堆積の違いがなぜ生じたのかは不明。また、黒色粘質土は地山の土には全く含まれておらず、どのようにして生成されたのかも不明である。

土坑の大きさと、堆積2種との間には相関関係は認められない。

現代の擾乱によって削平されている可能性もあるが、西北隅は土坑が希薄である。

## < II 区 >

(1面) 調査区の北端部で、北方に向かう落込みを検出した。落込みの肩は北で東に18度振れる。落込み内は4層に堆積する。上から7.5YR6/8 橙色粘質土（1層）、7.5YR6/2 灰褐色シルト（2層）、7.5YR6/6 橙色シルト（3層）、7.5YR5/8 明褐色粘土（4層）である。2層除去後の2面と3層除去後の3面で落込みの肩とほぼ並行する拗溝を検出した。



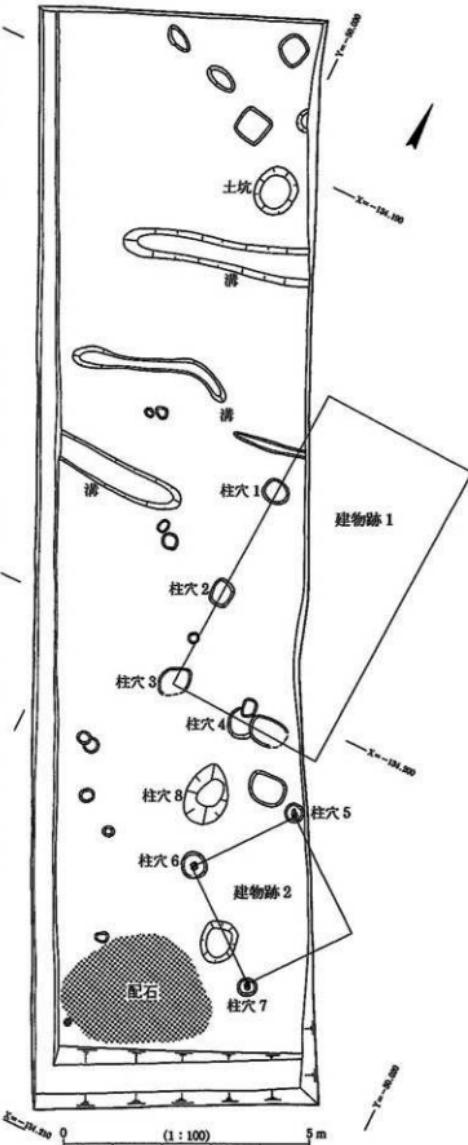
第5図 I区6面古墳時代後期土坑平面・断面図

その他顕著な遺構は検出できなかった。  
(2面)顕著な遺構は検出できなかった。  
(3面=地表面)奈良時代の遺構と古墳時代後期の遺構を同一面で検出した。奈良時代の遺構が古墳時代後期の遺構を切る。

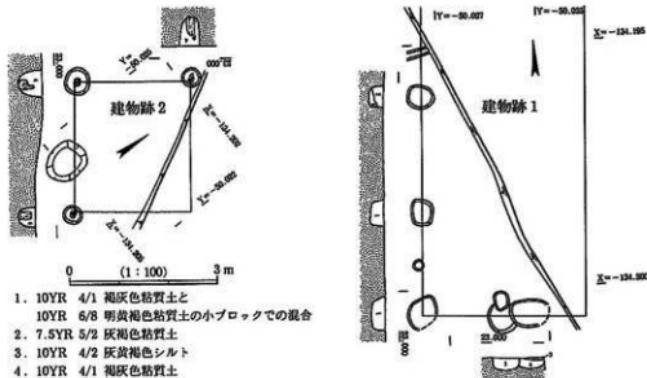
奈良時代の遺構には掘建柱建物跡2棟、配石、土坑、溝等がある。

建物跡1は調査区の東辺で検出した。この建物跡の東に螢池遺跡(1)で検出した「建物1」が近接していること、また東に接する螢池遺跡(1)の調査区内では北へ4間目の柱穴は検出されていない(3間目の柱位置はちょうど調査区の側溝位置にあたり不明)ことから、桁行3間、梁間2間の南北棟と推定できる。桁行2間、梁間1間分を検出した。柱間寸法は桁行が2.2m、梁間が1.7m等間である。北で東に3度振れる。

建物2は調査区の東南隅で検出した。東に接する螢池遺跡(1)の調査区内では、この建物跡の東へ2間目の柱穴は検出されていない。また南へ2間目の柱位置にあたる調査区南端の壁際を確認調査したが、柱穴は検出できなかった。したがって1間×1間の建物跡であることが判明する。柱間は東西が2.3m、南北が2.8mである。北で西に50度振れる。円形の柱掘方に柱根が残る。柱穴5からは最大径15cm、長さ47cm、柱穴6からは最大径20cm、長さ31cm、柱穴7からは最大径12cm、長さ26cmの柱根がそれぞれ出土した(写真2)。



第6図 II区3面奈良時代遺構平面図



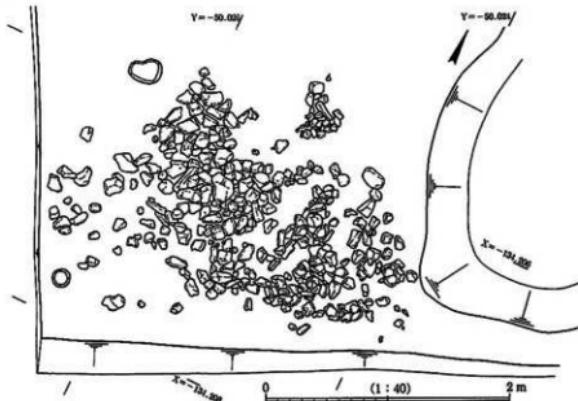
第7図 奈良時代建物跡平面・断面図

配石は調査区の西南隅で検出した。南北2.2m、東西3.1mの範囲に、10~15cm大の河原石を集めめた。部分的には石が敷きつめられている箇所もあり、上下2段に積み重ねられている箇所もある。石の向きはそろっておらず、石の上面も凹凸がある。石の種類は、砂岩、チャート、泥岩等である。炭や焼土等は検出されなかった。配石中央は東西方向に地盤が溝状に窪んでおり、何らかの目的で、この窪地に石を集積したものと考えられる。

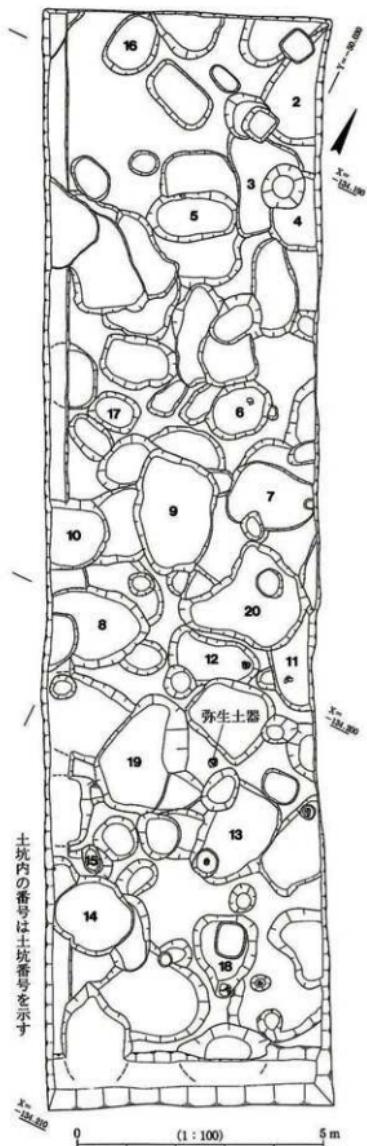
土坑は平面形が円形で、深さ60cmを測る。井戸とは考え難い。

溝は深さ約10cm程度の浅いもので、水流があった痕跡はない。

古墳時代後期の遺構には土坑がある。87基を検出した。I区同様に土壤墓の可能性が高いとされている土坑である。密集した不定形の土坑で、複雑に切り合っている。土坑の輪郭が不明瞭であったため、I区同様に若干3面を掘り下げて検出した。したがって、第10図では土坑の平面幅より断面幅が多少広くなるものもある。



第8図 配石遺構平面図



第9図 II区3面 古墳時代後期土坑平面図

小片も含め、87基中11基の土坑より土器片が出土した。すべてが破片で、完形品はない。以下に大型片が出土した土坑についてのみ報告する。

土坑4は長辺1.65m、短辺0.95m以上の円形と思われる。深さ0.25mで、土坑の底面から、古墳時代中期の須恵器壺の体部が出土した。土器の向き、出土位置は不明。

土坑5は長辺1.9m、短辺1mの楕円形で、深さ0.32mである。土坑の北の肩部から、弥生時代中期後半の壺底部片が出土した。おそらくこの土坑を掘削した古墳時代後期の時点で混入したものと思われる。

土坑6は長辺1.45m、短辺1.15mの楕円形で、深さ0.25mである。東北よりの底面から、古墳時代後期の須恵器の甕体部片が、外面向上にして出土した。

土坑11は長辺2.4m、短辺0.85m以上の楕円形と思われる。深さ0.14mで、西南よりの底面から、古墳時代後期の須恵器の甕体部片が、内面向上にして出土した。

土坑12は長辺1.9m、短辺1.05mの楕円形で、深さ0.19mである。土坑東端の底のやや上から、古墳時代後期の須恵器の甕体部片が、内面向上にして出土した。この土坑12出土の甕と土坑11出土の甕は接合する。

土坑14は長辺1.7m、短辺1.65mの円形で、深さ0.35mである。弥生時代中期後半の壺底部片が出土した。出土層位・位置は不明。おそらくこの土坑を掘削した古墳時代後期の時点で混入したものと思われる。

土坑18は長辺1.75m、短辺1.3mのナスピ形で、深さ0.42mである。土坑南端の底面から、古墳時代後期の須恵器の横瓶体部大型片が、内面向上にして出土した。

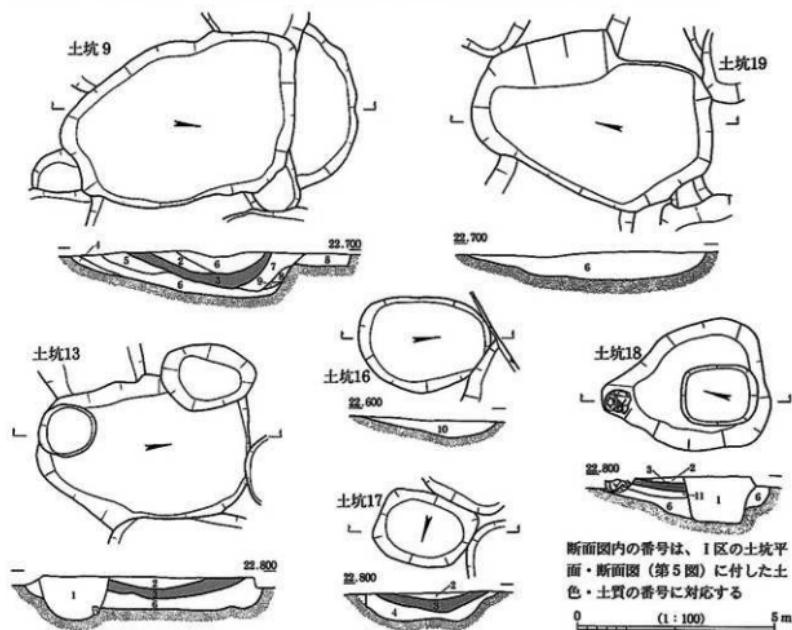
出土する土器には甕の破片が多く、また土器の内面向上にして出土するものが多い。

I区同様に、土坑の大きさを大中小の3種に分類することができる。大型のものは87基中27基で、全体の31%、中型のものは35基で全体の40%、小型のものは25基で全体の29%である。

平面形は円形、楕円形、隅丸の方形、ナスピ形などがある。

また、土坑の堆積の仕方にも、I区同様に2種があることが判明する。すなわち、1：レンズ状の堆積を示し、中間層に黒色粘質土層が入るもの、2：レンズ状の堆積

をせず、黄橙色砂質土・黒色粘質土・褐灰色粘質土の3種が大きなブロックとして混在する1層だけのもの、の2種である。前者には土坑13・18、後者には土坑19などが典型例としてあげられる。



第10図 II区3面古墳時代後期土坑平面・断面図



写真2 建物跡2柱穴出土柱根(右から柱穴6、7、5)

### 第3節 遺物

以下、出土した遺物について調査区ごとに簡単に報告する。個々の遺物については詳細を一覧表にまとめた。

#### < I 区 >

(井戸) 井戸枠として瓦が使われていた。平瓦であるが、おそらく井戸枠専用の瓦であろう。凸面に楔状の押型を綾杉状に施す。3列に施すものと、4列に施すものがある。前者(14右)は縦23cm、横22.5cm、厚さ3.5cm、後者(14左)は縦23.5cm、横22.5cm、厚さ3cmである。両者とも狭端・広端の差はない、井戸枠を円形に組んだときに、何段でも垂直に組めるように当初から設計されている。

(1面鋲溝) 鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器が出土した。

(2層) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の瓦器が出土した。瓦器は足釜と思われる。

(2面鋲溝) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の須恵器が出土した。鎌倉時代の須恵器は、こね鉢片である。

(3層) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の瓦器が出土した。

(4層) 古墳時代中期・後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

(5層) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

(6層) 弥生土器、古墳時代後期の須恵器が出土した。この層は土器の出土量が少ない。

(土坑) 弥生土器、古墳時代後期の須恵器が出土した。古墳時代後期の須恵器には焼成不良のものが多い。

#### < II 区 >

(1面) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

(北方落込み) 繩文時代前期の石器、古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、江戸時代の陶器が出土した。繩文時代前期の石器は落込み内の4層中から出土した。完形の横型石匙である。サヌカイト製で、外面は暗灰色に風化している。原礫面を残す部分がないことから、剝片を調整加工して作られたものであることが分かる。

(2層) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。古墳時代後期の須恵器には坏蓋片(12)がある。天井部の破片で、内面は不定方向に丁寧にナデ、外面もヘラ削りの後に回転のナデを施す。外面に×の線刻がある。

(2面) 古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器のほか、12世紀の白磁IV類の碗小片が1点のみ出土した。2層及び2面から出土する土器は、この1点以外はすべてが古墳時代後期から奈良時代までの須恵器・土師器であることから、この白磁碗は混入したものと考えられる。

(3面=地山面) 弥生時代中期後半の壺の底部片が、底部を上にして伏せた状態で出土した。表面は磨滅しており、調整不明。内面には朱が付着する(表紙カラー左下)。土器棺であったか、朱の容器であったのかは不明。

(3層) 旧石器、弥生土器、古墳時代中期・後期の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

旧石器は完形の国府型ナイフ形石器である。サヌカイト製で、外面は灰色に風化している。翼状剝片石核から最初に剥ぎ取られた翼状剝片の背部を主要剝離面側から調整加工してナイフ形石器に仕上げら

れている。先端は鋭く、基部は折り取られている。

(建物跡) 柱穴から奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

(配石) 古墳時代中期・後期の須恵器が数点含まれるが、それ以外はすべてが奈良時代の須恵器・土師器である。石の間から出土した。

(土坑) 弥生土器、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。土坑18からは横瓶が出土した。体部成形の最後に蓋をする側の体部大型片である。体部が灰白色であるのに対して、蓋は暗灰色を呈する。異質の粘土を使って蓋をしたことが判明する。蓋の内面にも当て具痕が及ぶ。

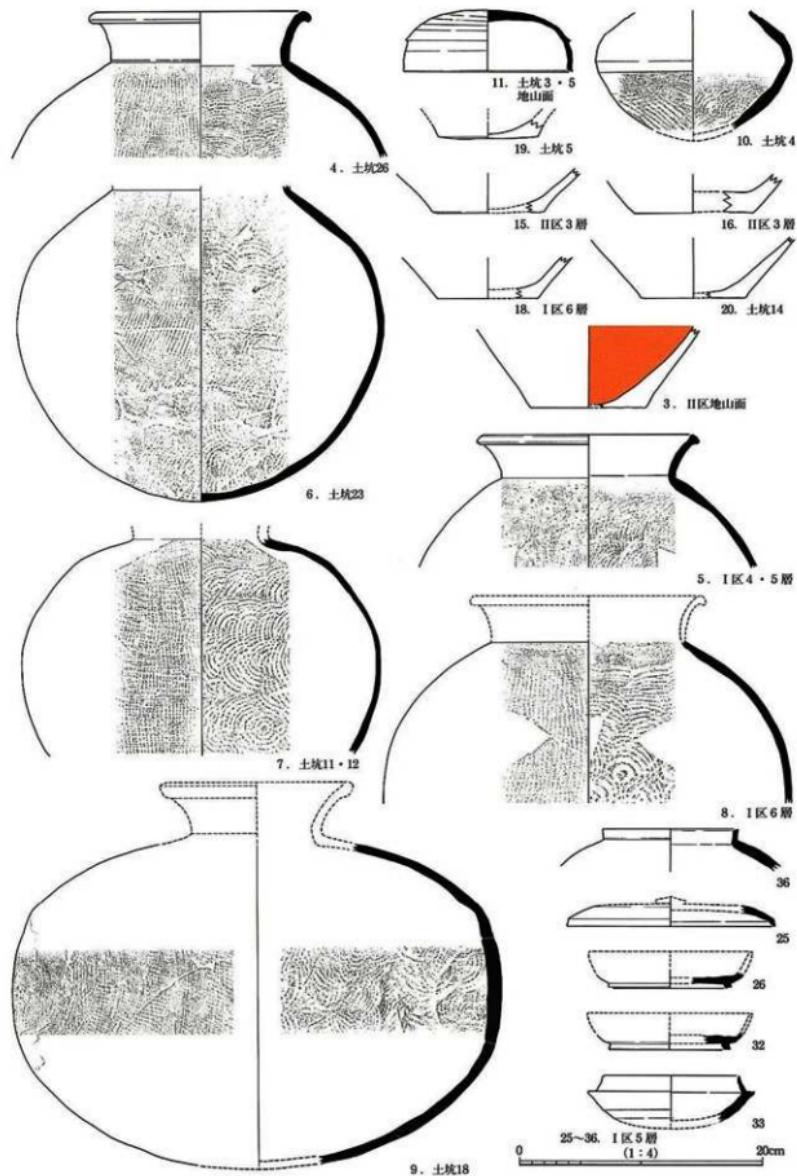
第1表 出土遺物一覧表

番号	地区	出土層位・遺構	時代	種類	器種	残存部位	備考
1	II区	3層	旧石器時代	石器	ナイフ形石器	完形	
2	II区	北方落込み4層	縄文時代前期	石器	石匙	完形	
3	II区	地山面	弥生中期後半	弥生土器	壺	底部	内面は朱が付着
4	I区	土坑26	古墳時代後期	須恵器	甕	口縁～体部	
5	I区	4・5層	古墳時代後期	須恵器	甕	口縁～体部	
6	I区	土坑23	古墳時代後期	須恵器	甕	体部	焼成不良
7	II区	土坑11・12	古墳時代後期	須恵器	甕	体部	
8	I区	6層	古墳時代後期	須恵器	甕	体部	
9	I区	土坑18	古墳時代後期	須恵器	横瓶	体部	
10	II区	土坑4	古墳時代中期	須恵器	壺	体部	
11	II区	土坑3.5.地山面	古墳時代中期	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	
12	II区	2層	古墳時代後期	須恵器	坏蓋	天井部	天井部に×の線刻あり
13	II区	配石内	奈良時代	土師器	坏	口縁～底部	
14	I区	井戸	江戸後期以降	瓦	井戸枠瓦	完形	井戸枠に使用
15	II区	3層	弥生時代中期 後半	弥生土器	壺	底部	
16	II区	3層				底部	
17	II区	土坑14				体部	20と同一個体か
18	I区	6層				底部	
19	II区	土坑5				底部	
20	II区	土坑14				底部	17と同一個体か
21	I区	土坑24	古墳時代後期	須恵器	甕	底部	
22		土坑33				体部	焼成不良
23			古墳時代中期	須恵器	壺	口縁部	
24						底部	
25			奈良時代	須恵器	坏	底部	
26						口縁部	
27			奈良時代	須恵器	蓋	底部	
28						口縁部	
29			古墳時代後期	須恵器	甕	底部	
30						口縁部	
31			古墳時代後期	須恵器	坏身	底部	
32						口縁部	
33			古墳時代後期	須恵器	坏蓋	底部	
						口縁部	

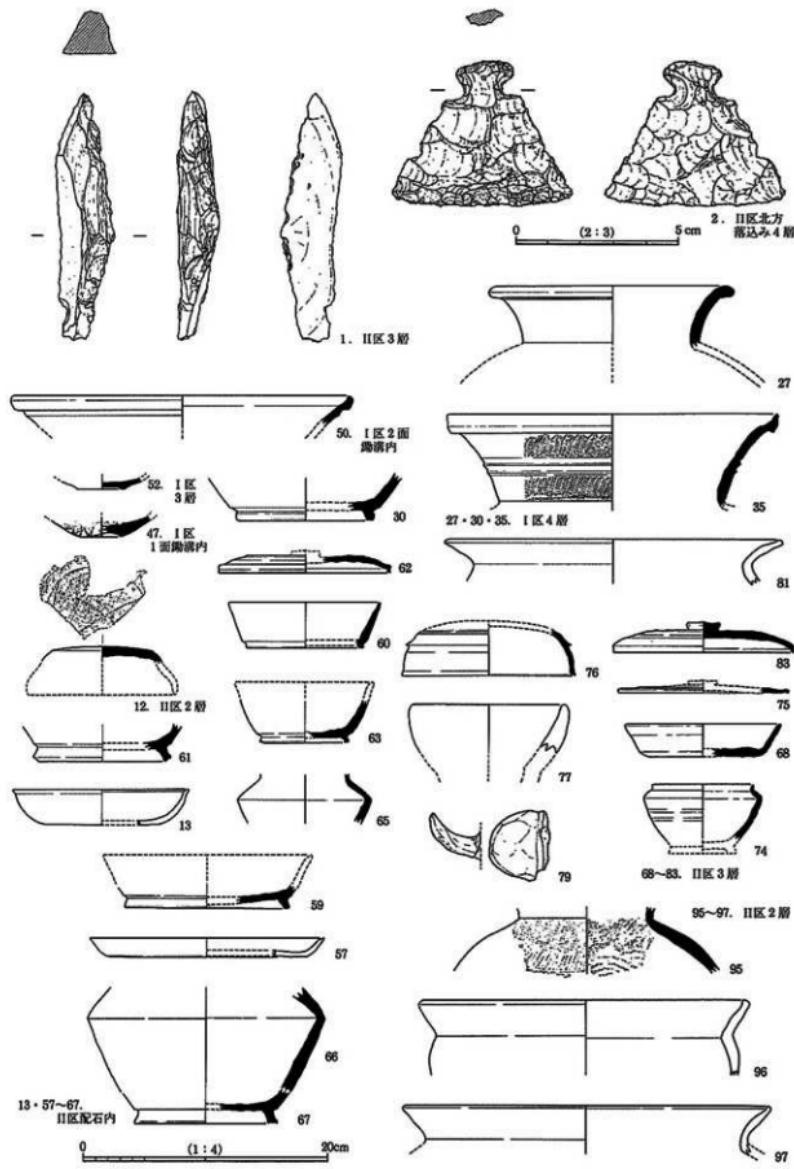
34	I 区	4層	奈良時代	須恵器	壺	口縁部	
35			古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
36			奈良時代	須恵器	壺	口縁部	
37			奈良時代	須恵器	坏	底部	焼成不良
38			奈良時代	須恵器	坏	底部	焼成不良
39			奈良時代	須恵器	壺	頸部	
40			奈良時代	須恵器	蓋	つまみ	
41			古墳時代後期	須恵器	壺	体部	
42			奈良時代	須恵器	壺	体部	
43			奈良時代	須恵器	壺	体部	
44			古墳時代後期	須恵器	壺	体部	底部外面調整 叩き→カキメ→叩き
45		1面鋤溝内	江戸時代	磁器	碗	体部	
46			鎌倉時代	瓦器	碗	体部	
47			江戸時代初期	陶器	碗	底部	唐津焼
48		2層	古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
49			鎌倉時代	瓦器	足釜	体部	
50		2面鋤溝内	鎌倉時代	須恵器	こね鉢	口縁部	
51			鎌倉時代	瓦器	羽釜	体部	
52			鎌倉時代	瓦器	碗	底部	
53		3層	古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
54			古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
55	II 区	配石内	奈良時代	土師器	壺	体部	
56			奈良時代	土師器	壺	底部	
57			奈良時代	土師器	坏	口縁～底部	
58			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
59			奈良時代	須恵器	坏	底部	
60			奈良時代	須恵器	坏	口縁～底部	
61			奈良時代	須恵器	壺	底部	
62			奈良時代	須恵器	蓋	口縁～天井部	
63			奈良時代	須恵器	坏	底～体部	
64			古墳時代中期	須恵器	台付壺	坏部底部	
65			奈良時代	須恵器	壺	体部	
66			奈良時代	須恵器	壺	体部	同一個体
67			奈良時代	須恵器	壺	底部	
68		3層	奈良時代	須恵器	坏	口縁～底部	
69			奈良時代	須恵器	平瓶	体部上面	
70			古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
71			古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
72			古墳時代後期	須恵器	壺	口縁部	
73			奈良時代	須恵器	蓋	口縁部	
74			奈良時代	須恵器	壺	口縁～体部	
75			奈良時代	須恵器	蓋	口縁部	
76			古墳時代中期	須恵器	坏蓋	口縁部	

77	II区	3層	奈良時代	製塙土器		口縁部	
78			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
79			奈良時代	土師器	壺	把手	
80			奈良時代	土師器	壺	頸部	
81			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
82			奈良時代	土師器	壺	体部	
83			奈良時代	須恵器	蓋	口縁～つまみ	
84		2層	奈良時代	須恵器	壺	口縁～底部	
85			奈良時代	須恵器	壺	底～体部	
86			奈良時代	須恵器	蓋	口縁～天井部	
87			奈良時代	須恵器	壺	口縁～頸部	
88			奈良時代	須恵器	壺	底部	
89			奈良時代	須恵器	壺	底部	
90			奈良時代	須恵器	壺	底部	
91			奈良時代	須恵器	壺	底部	
92			奈良時代	須恵器	壺	底部	
93			奈良時代	須恵器	壺	底～体部	
94			奈良時代	土師器	壺	底部	
95			古墳時代後期	須恵器	壺	体部	
96			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
97			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
98			奈良時代	土師器	壺	口縁部	
99		1面	奈良時代	須恵器	壺	口縁～体部	
100			奈良時代	須恵器	壺	底部	
101			奈良時代	須恵器	蓋	口縁部	
102			奈良時代	須恵器	壺	底部	底部に刻跡あり
103			奈良時代	須恵器	壺	口縁～頸部	
104		2面	平安時代	白磁	碗	口縁部	N類
105		北方落込み2層	平安時代	須恵器	こね鉢	底部	
106			鎌倉時代	須恵器	鉢	口縁部	
107		北方落込み2面 錦溝内	鎌倉時代	瓦器	碗	体部	
108			奈良時代	須恵器	壺	頸部	
109			奈良時代	須恵器	壺	底部	
110		北方落込み4層	奈良時代	須恵器	鉢	口縁～体部	
111			穴 8	奈良時代	須恵器	壺	頸部

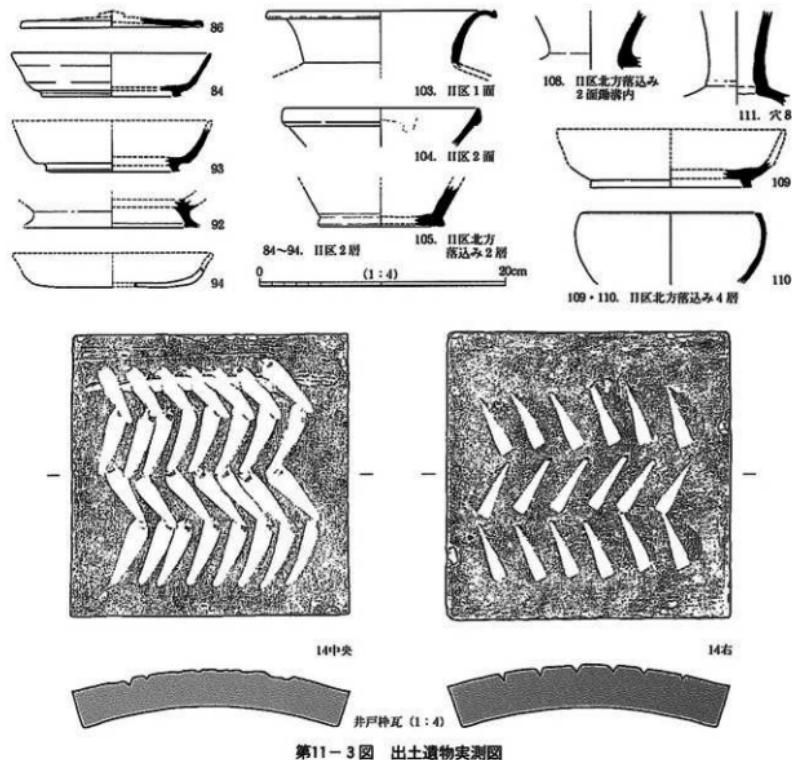
番号は実測図番号および写真番号に対応する



第11-1図 出土遺物実測図



第11-2圖 出土遺物實測圖



第11-3図 出土遺物実測図

## 第4章 まとめ

以下に、今回の調査のまとめと、若干の考察を記す。

◎出土した遺物から、各層・各遺構の年代を上記のとおりもとめることができる。

調査区	層位(面)・遺構	年代	調査区	層位(面)・遺構	年代
I区	1面鋤溝	江戸時代遺構	II区	北方落込み	鎌倉時代
	2層	鎌倉時代		2層	奈良時代
	2面鋤溝	鎌倉時代		3層	奈良時代
	3層	鎌倉時代		建物跡1・2	奈良時代
	4層	奈良時代		配石	奈良時代
	5層	奈良時代	I区・II区	土坑	古墳時代後期
	6層	古墳時代後期			

なお、I 区の 2 層からは、今回の調査では鎌倉時代までの土器しか出土しなかったため、その年代を鎌倉時代としたが、土層観察からは、明らかに青灰色粘質土の近世以降の耕土層といえる。

◎ I 区では、1 面で江戸時代後期以降の瓦積みの井戸を 1 基検出した。

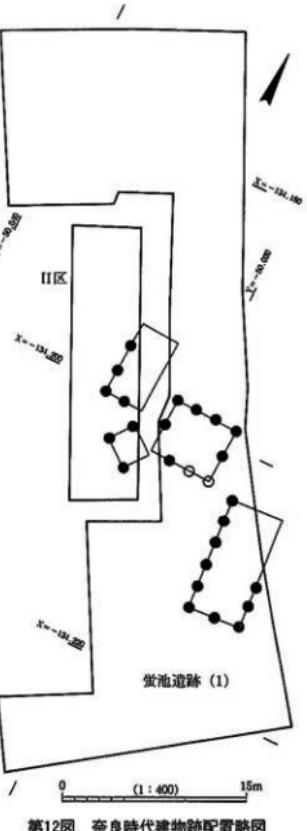
◎ I 区 1 面では北で西に約 17 度振れる鋤溝を検出した。麻田藩陣屋の振れに近い。陣屋が構えられた 17 世紀初頭以降の鋤溝か。また、2・3 面では中世の鋤溝を検出した。両者とも国土座標の東西南北にはほぼ重なる。4 面検出の溝 1 条は鋤溝であるかは不明である。1~3 面にわたる鋤溝は、3 面とも国土座標の X = -134.158 のラインを境に溝方向が変わる。これは単に同一耕作地内における畠方向の違いというより、この場所で耕地区画が変わったことを示しているといえよう。螢池遺跡（1）の調査では、X = -134.180 のラインで方向が変わる鋤溝を検出しており、この間は 22m となる。

◎ II 区では奈良時代の掘立柱建物跡を 2 棟検出した。建物跡 1 は桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟と推定され、建物跡 2 は 1 間 × 1 間の建物跡であることが判明した。螢池遺跡（1）の調査で検出した桁行 5 間、

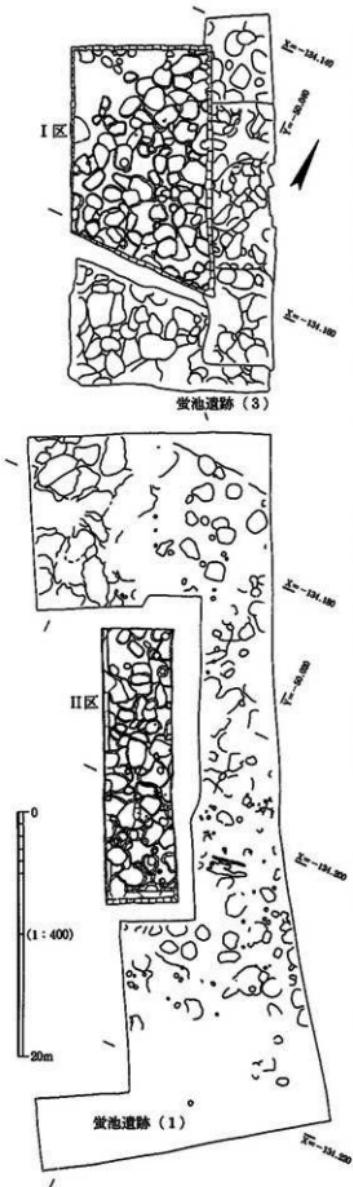
梁間 2 間の南北棟と、桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟とをあわせると、この一画に奈良時代の建物跡を 4 棟検出したことになる。ただし、今回検出した建物跡 2 は、他の 3 棟とは建物の向きを異にする。3 棟がほぼ東西南北を向くに對して、建物跡 2 は北で西に 50 度と大きく振れる。奈良時代の中で、3 棟が建っていた時期と、建物跡 2 が建っていた時期の 2 時期があったと考えられる。建物跡 2 の柱穴に柱根が残っていたことなどを考えると、建物跡 2 が後に建てられた建物か。ところで、『続日本紀』によれば、百濟から渡来したと伝えられる陽春なる人物が、奈良時代の神龟元年（724）に麻田連の姓を賜わったとされている。ここ麻田の地は彼が居を構えていた場所と推定されており、検出した上記 4 棟の建物跡は時代的にも重なる。麻田氏との関係で注目される。

◎ 建物跡 2 の西側には、南北 2.2m、東西 3.1m の範囲に配石遺構が検出された。石の間からは、奈良時代の須恵器・土師器片が出土したが、炭や焼土等は検出されなかった。配石中央は東西方向に地盤が溝状に少し窪んでおり、この窪地に石を集積したものと考えられる。配石の目的は不明。建物跡 2 に伴う遺構か。

◎ I 区・II 区合わせて古墳時代後期の土坑を 206 基検出した。この土坑については、螢池遺跡（1）の調査で行った土坑内に残る残存脂肪の分析で、高等動物の脂肪が残存していることが確認されており、粘土採掘坑とするよりは、土壤墓の可能性が高いとされている。今回の調査では、科学的な分析を行っていないため断定はできないものの、土坑内より出土する土器の出土状況からは、粘土を採掘した



第12図 奈良時代建物跡配置略図



第13図 古墳時代後期土坑群分布図

穴に土器が混入したというより、土器を埋納したという感じを受ける。

◎この土坑はその大きさに大中小の3種がある。206基中大型の土坑が56基で全体の27%、中型のものが93基で45%、小型のものが57基で28%を占める。これらの違いが何に起因するものなのかは不明。土壇墓だとすれば、この中に入れられる人体の大きさに起因するものか。

◎堆積の仕方も大きく2種があることが判明した。すなわちレンズ状の堆積を示し、中間層に黒色粘質土層が入るものと、レンズ状の堆積をせず、黄橙色砂質土・黒色粘質土・褐灰色粘質土の3種が大きなブロックとして混在する1層だけのものの2種である。この2種の堆積の違いがなぜ生じたのかは不明。また、黒色粘質土は地山の土には全く含まれておらず、どのようにして生成されたのかも不明。

高等動物の脂肪である可能性もあり、今後の科学的な分析を期待したい。

◎各調査区の遺物包含層、土坑内、地山面などから弥生土器が出土した。地山面から出土したものには内面に朱が付着している。土器棺か朱の容器かは不明。遺物包含層、土坑内から出土したものは弥生時代以降の搅乱によって包含されたものと思われる。

◎II区の遺物包含層からは、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代前期の石匙が出土した。旧石器はこれまでの調査でも出土しており、近くにキャンプ地的な施設があったことを窺わせる。

#### 註

- (1) 螢池遺跡(1・2)のII層 灰黃褐色シルト層に相当すると思われる。
- (2) 大阪文化財センター 1994『宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡』
- (3) 同上 P.167~175

# 図 版

遺構 図版 1 ~ 4

遺物 図版 5 ~ 10

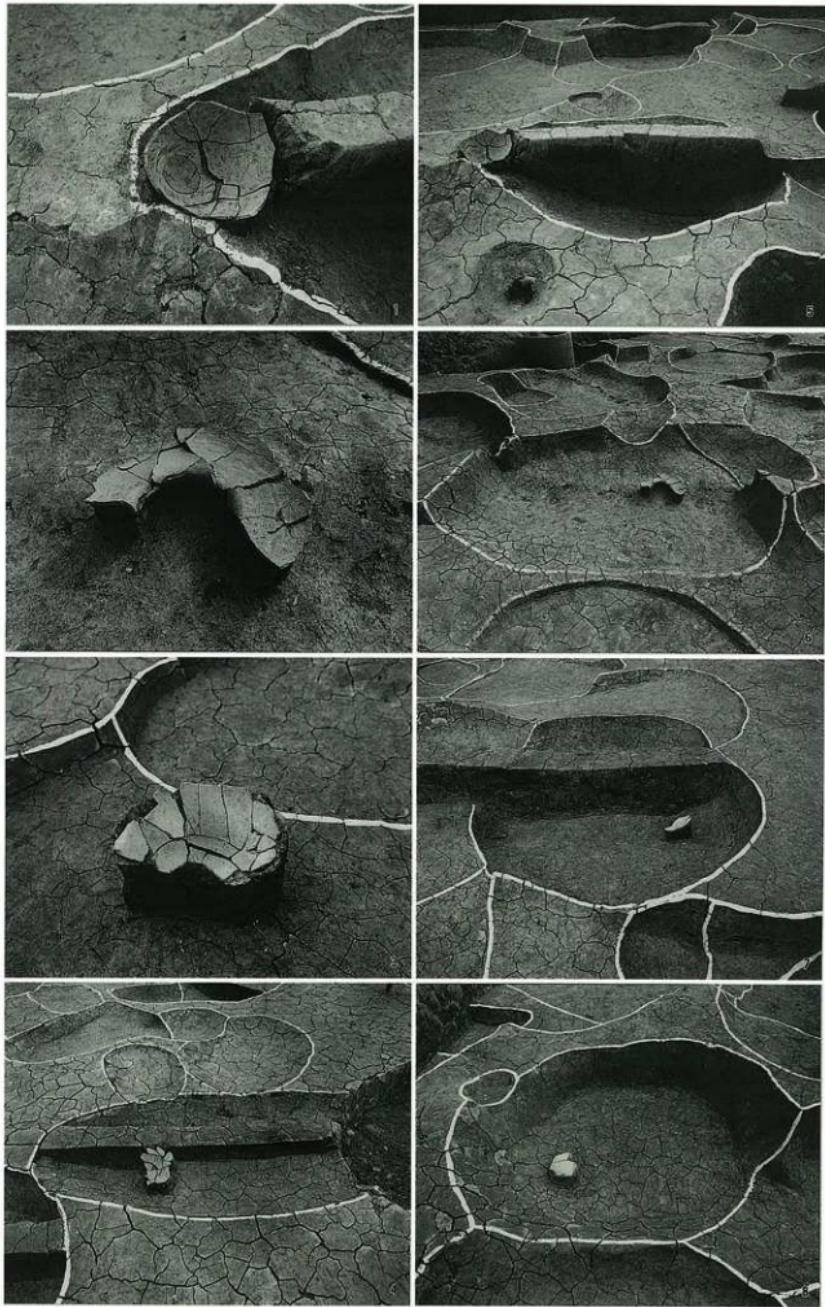




I 区 6 古墳時代後期の土坑群全景（東南から）



II 区 3 古墳時代後期の土坑群全景（南から）



1. 土坑18横瓶出土状况  
2. 土坑26甕出土状况

3. 土坑23甕出土状况  
4. 土坑33  
5. 土坑18  
6. 土坑26  
7. 土坑21  
8. 土坑6



II区3面奈良時代造構全景（南から）



1. 建物跡1  
2. 配石造構と奈良時代の須恵器坏

3. 建物跡2  
4. 配石造構



1. II区地山面(3面)出土弥生土器

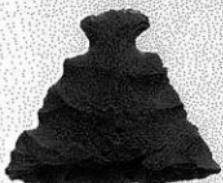
2. I区1面鋤溝

3. I区3面鋤溝

4. 井戸

5. I区2面鋤溝

6. II区北方落込み2面鋤溝



2



3



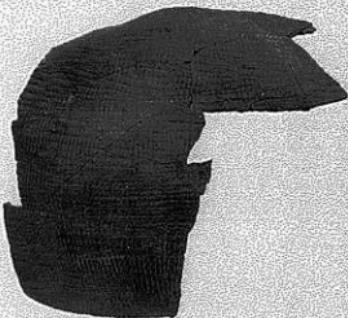
4



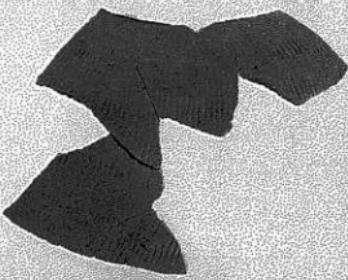
5



6



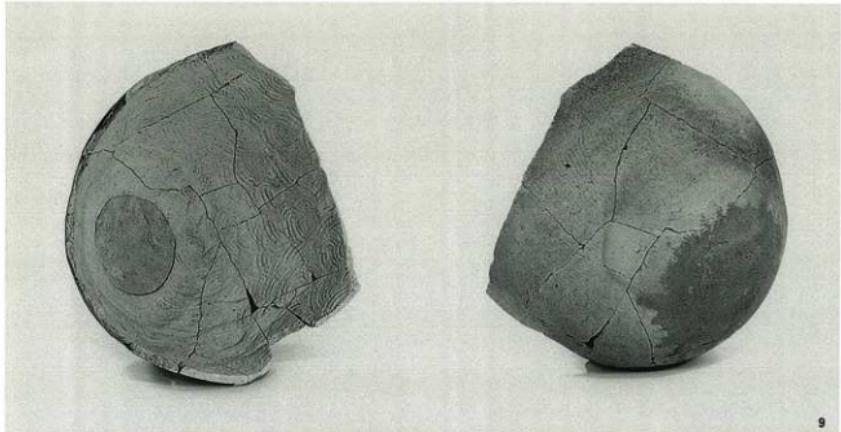
7



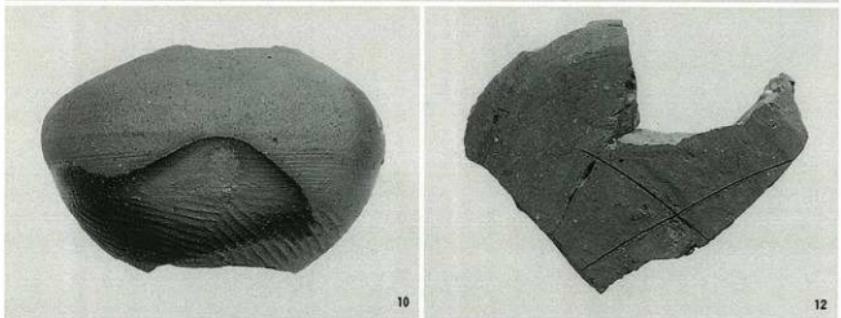
8

1. II区3層出土旧石器  
2. II区北方落込み4層出土石器  
3. II区地表面出土弥生土器  
4. 土坑26出土須恵器  
5. I区4・5層出土須恵器

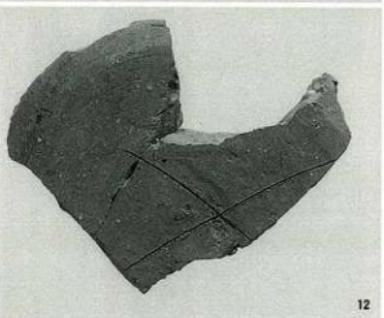
6. 土坑23出土須恵器  
7. 土坑11・12出土須恵器  
8. I区6層出土須恵器



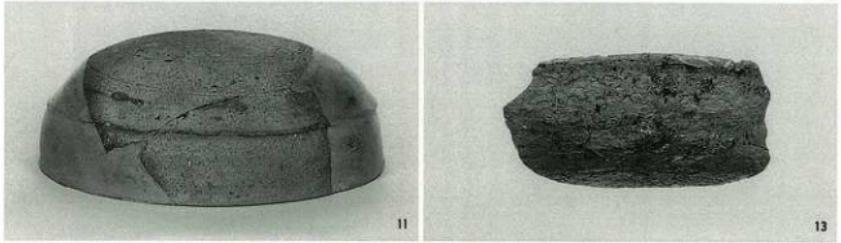
9



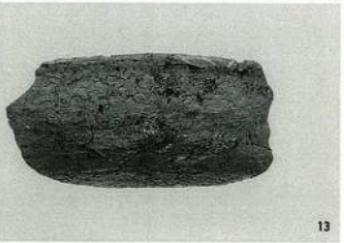
10



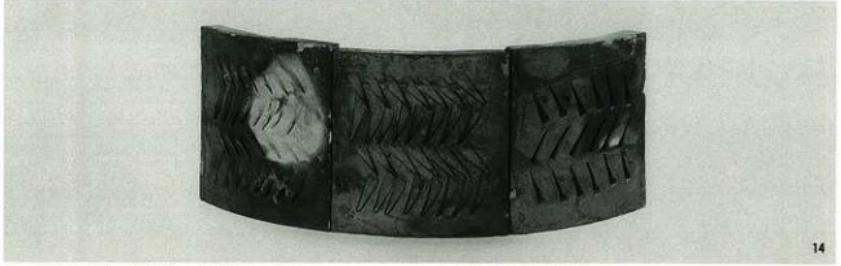
12



11



13



14

9. 土坑18出土須恵器（左：内面、右：外面）

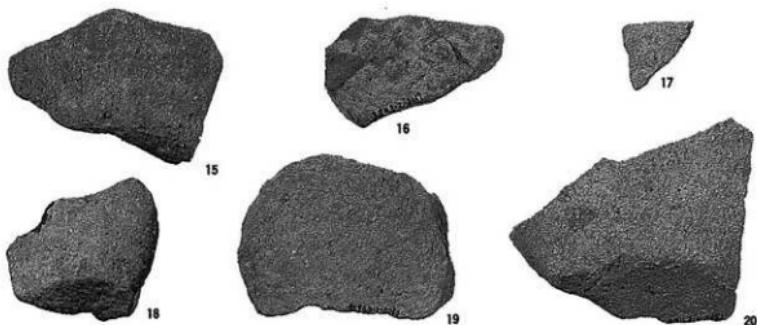
10. 土坑4出土須恵器

11. 土坑3・5・地山面出土須恵器

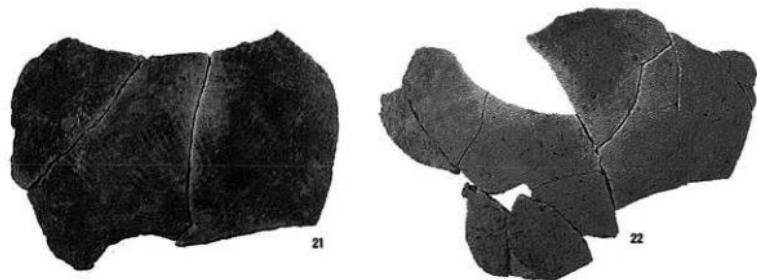
12. II区2層出土須恵器

13. 配石内出土土師器

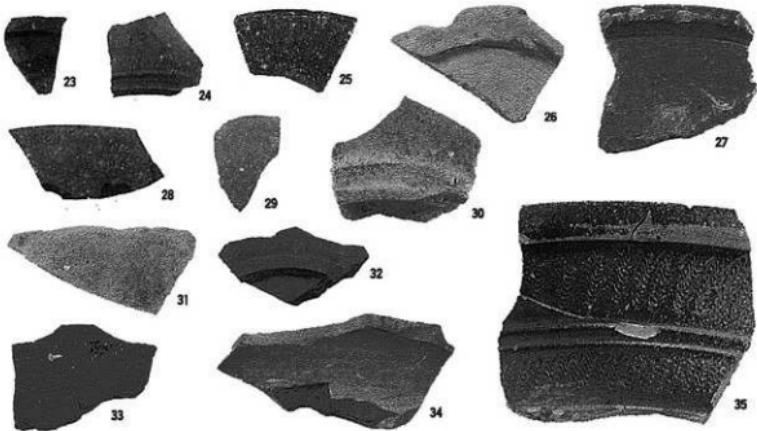
14. 井戸枠瓦



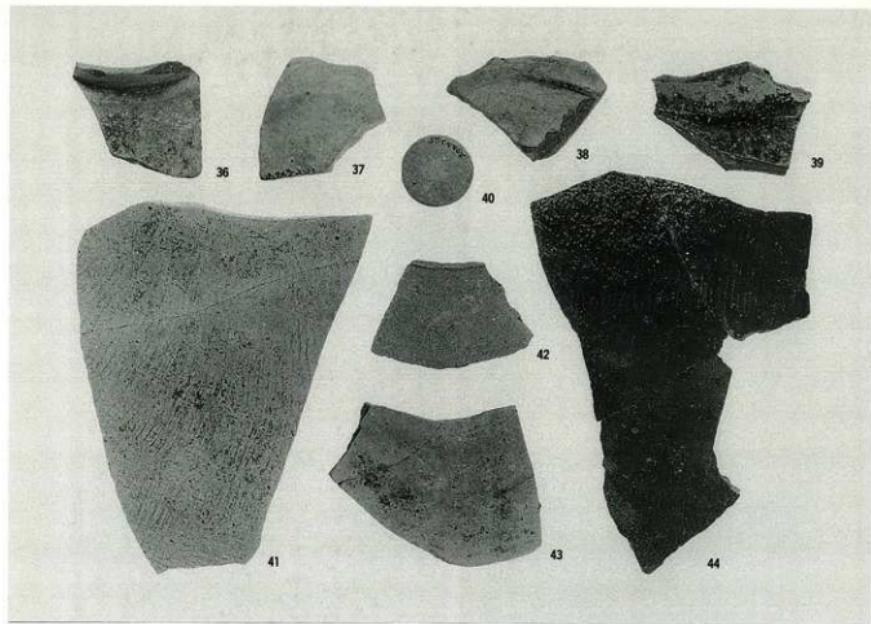
弥生土器 (15・16: II区3層、17・20: 土坑14、18: I区6層、19: 土坑5)



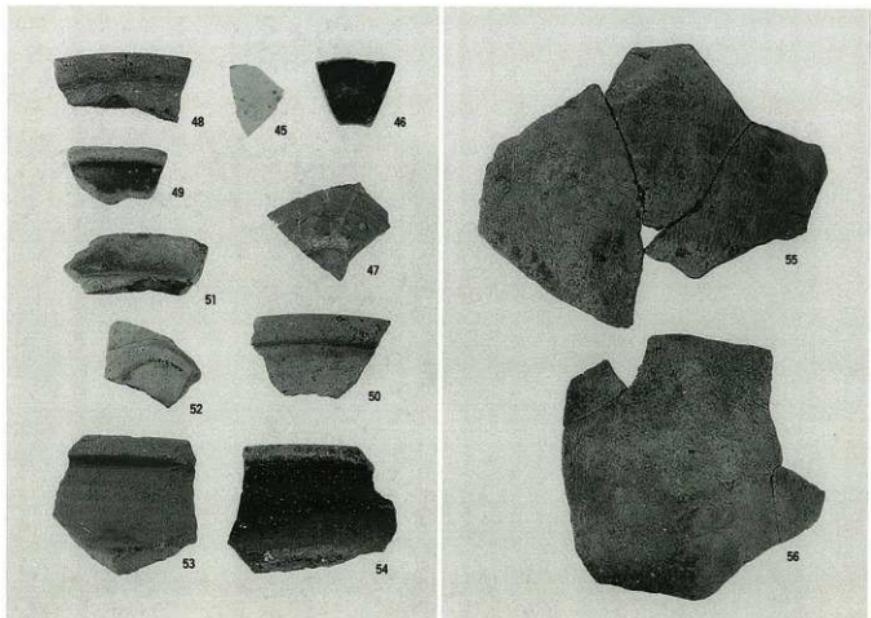
古墳時代後期土坑出土須恵器 (21: 土坑24、22: 土坑33)



I区4層出土土器

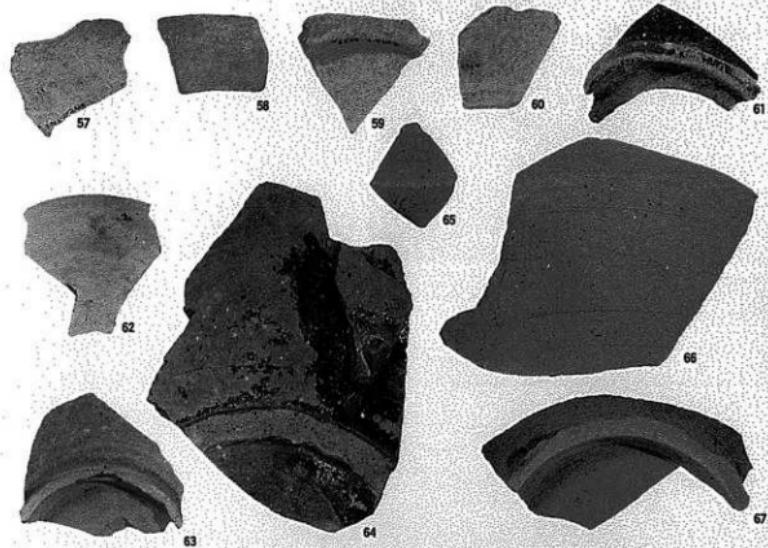


I 区 5 层出土土器

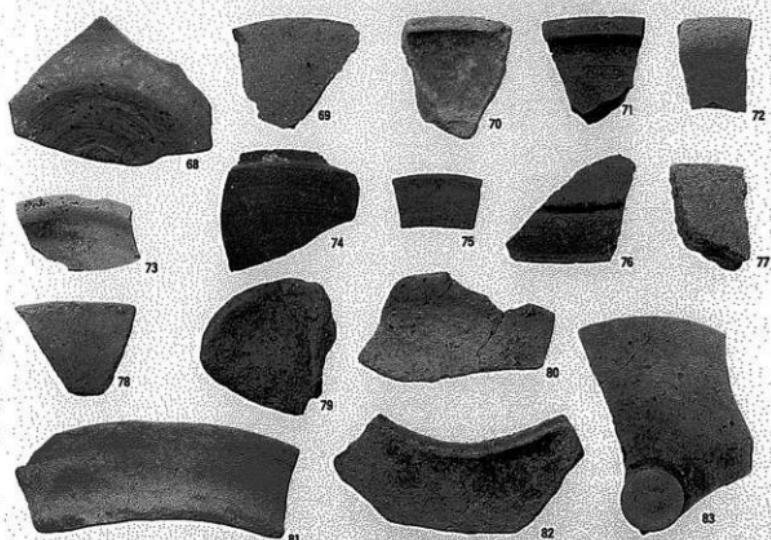


I 区 鑿溝・包含層出土土器 (45~47: 1面鑿溝内、48~49: 2層、  
50: 2面鑿溝内、51~54: 3層)

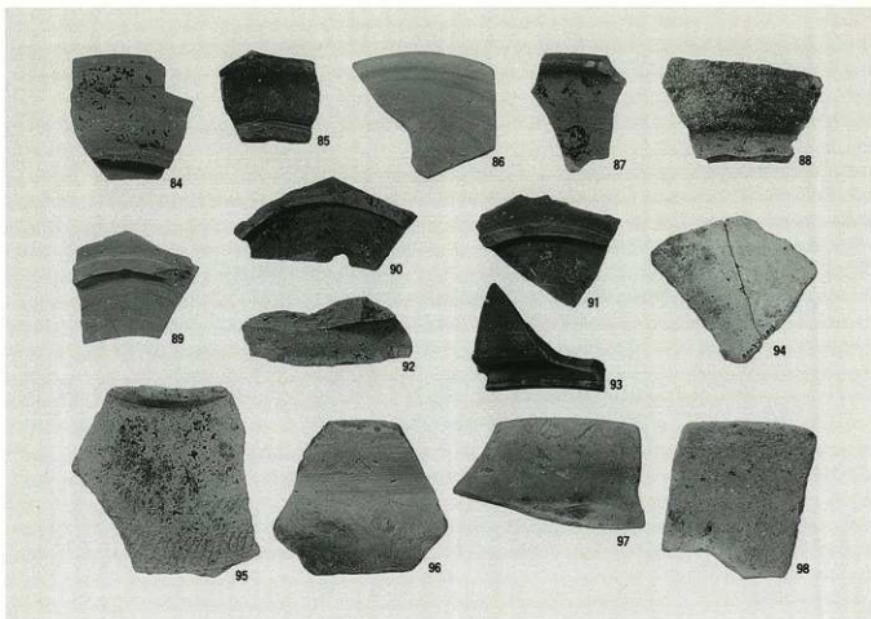
II 区 配石内出土土器



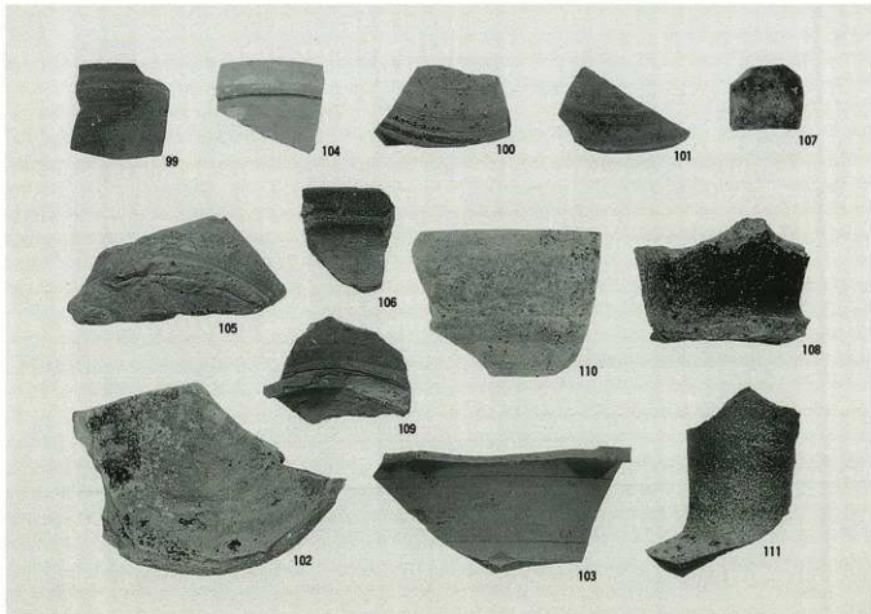
II 区配石内出土土器



II 区 3 層出土土器



II区2層出土土器



II区遺構・遺構面出土土器（99～103：1面、104：2面、105～106：北方落込み2層、  
107～108：北方落込み2面築溝内、109～110：北方落込み4層、111：穴8）

## 報告書抄録

ふりがな	ほたるがいけいせき（その3-2）はくつちょうさはうこくしょ
書名	螢池遺跡（その3-2）発掘調査報告書
副書名	大阪モノレール螢池西線建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	側大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第22集2
編著者名	西口陽一・伊藤 武
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階 TEL06-934-6651
発行年月日	1997年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y			
螢池遺跡	大阪府 豊中市 螢池中町	27203	59	34°47'22" ~ 34°47'19" -134,140 ~ -134,210	135°27'12" ~ 135°27'10" -50,020 ~ -50,060	1997.8.29 ~ 1997.11.30	314m <sup>2</sup>	大阪モノレール 建設に伴う発掘 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
螢池遺跡 (その3-2)	旧石器 縄文 弥生 古墳後期 集落 耕地	奈良 鎌倉～江戸	密集土坑 掘立柱建物、石敷、土坑、礪 鋪溝、井戸	ナイフ形石器 石匙 壺 須恵器蓋坏、壺、壺 須恵器坏、壺、壺、壺、土師器器、坏	内面に朱

側大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第22集2

### 螢池遺跡（その3-2）

#### 発掘調査報告書

－大阪モノレール螢池西線建設に伴う発掘調査－

発行年 1997年11月30日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3

小森ビル4階

TEL06-934-6651 FAX06-934-7029

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

